石川県南加賀地域における白山信仰

西出佳那子

はじめに

日本では，古来，山岳は神霊の宿る場所・死者の赴く場所，農耕・生活に不可欠な水源として，仰がれ崇拝の対象とされてきた。それが，仏教や神道などの宗教と結びつき，山岳修験道 [1]が形成された。この山岳修験道の拠点となった山は，近畿地方では大峯山・熊野三山・葛城山・比叡山・高野山，それ以外の地方では，日光・白山・立山・伯耆大山・富士山・羽黒山・彦山などがあげられる(文化庁 1972)。

山岳修験道では大峯講や富士浅間講，羽黒講などのように，それぞれに講が存在している。文化庁(1972)作成の『日本民俗地図』によれば，東北地方には出羽三山系の三山講や最上講・羽黒講などが分布し，関東から東海にかけての地方では富士浅間講や榛名講・秋葉講などが広く分布している。近畿から中国・四国地方では大峯講，山上講，行者講や愛宕講が広く分布し，富士浅間講や秋葉講も多く分布している。全国の分布を見渡すと，富士浅間講・秋葉講・大峯講などが広く分布している。しかし，文化庁(1972)(図 1)による民俗地図には北陸地方の講の分布がまったくなく，白山・立山の記載すら見られない。

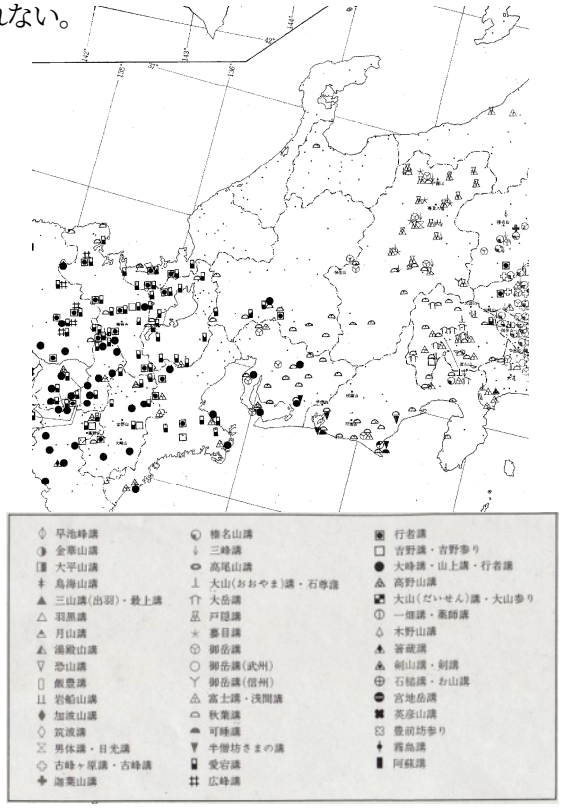

図 1：山岳信仰関係の講の分布

白山も立山も山岳信仰・山岳修験道の拠点となった地域で，白山に関しては，例えば，能登の鳥屋町春木地区で白山講が開かれている(福原 2003)。それにも拘わらず民俗地図には白山に関わる講が描かれておらず，十分な調査が行われていないことが分かる。

石川県・福井県・岐阜県にまたがってそびえる白山は，富士山・立山とともに日本三霊山・三名山に数えられる山であり，富山県の民謡おわら節でも「越中で立山　加賀では白山　駿河の富士山三国一だよ」と唄われている。また，『古今和歌集』で紀貫之が「おもひやる　越のしら山　知らねども　一夜も夢に　こえぬ夜ぞなき」と詠い，藤原兼輔は「君がゆく　こしの白山　しらねども　ゆきのまにまにあとをたづねん」と詠っており，白山が古くから日本の名山であったことを窺わせる(高瀬 1977)。

白山は，四季を通して山頂が白く遠望されることからその名がついたといわれ，その名の通り，白く美しい山容は人々からふるさとの山と慕われてきた。石川県の加賀地方の小・中学校では校歌の中に「青雲なびく白山」「白山の雄々しき姿」などと歌われている。朝倉(1999)の調査結果と筆者自身の調査結果とを合わせると，中学校だけで 39 校，南加賀地域の小学校では 36 校と，作者が重複しているものも含め，多くの小・中学校の校歌に「白山」が登場している(表 1)。

表 1：校歌に白山を示す語が含まれる南加賀地域の小中学校

＊校歌に出てくる「白山」

白山　大白山　越の白山　雪照る山脈　白山の峰　白き山脈　白きやまなみ　白き山　真輝く白山　越のしらやま　白峰　白峯　白き峰　白山の峯　越の嶺　雪白山　白嶺　加賀白山　白やま　加賀の白山

＊校歌に「白山」を含む中学校

・**南部中学校**　作詞・蕪城正芳　作曲・浅井森八郎

2 青雲なびく　白山の　高きのぞみに　胸はりて　進むひとみの　輝きは　あすへ雄飛の力あり　正しき南部　つくらばや

・**寺井中学校**　作詞・川口久雄　作曲・大原善衛

1 青雲のそらに明るく　白山の雪ぞ輝く　越の海の潮も湧くべし　光あれ　われらが校舎　いざここに　和して学ばむ

・**鳥越中学校**　作詞・大沢衛　作曲・佐々木宣男

1 山また山の　とりよろう　奥に冴ゆるや　白き峰　文の幾山　踏みわけて　たかきこころを　きわめなん

＊校歌に「白山」を含む小学校

・**黒崎小学校**　作詞・野田稔　作曲・山谷善男

1 白山の　高嶺遠く　若草の　もゆる丘べに　磯馴れの　松は色濃く　砂山の　連なるところ　ああ黒崎の　その名うるわし

・**庄小学校**　作詞・藤田福夫　作曲・中村外治

1 仰げ東の白山を　今厳かに朝は明け　光の中に天と地の　希望の声をきいてたつ　ああ　日本のこどもだ　われら

・**湯野小学校**　作詞・　作曲

1 国のしずめと　とこしえに　空にそびゆる　白やまの　とうときすがた　仰ぎつつ　とわにかわらぬ　一すじのまことの道を　進まなん

・**白峰小学校**　作詞・浅野律太郎　作曲・鴛原利蔵

1 越路の鎮め　白山の　山ふところに　抱かれて　こぶし花咲く　白峰の　里わに香る　若草よ　みんな明るく　伸びやかに

(聞き取り調査に基づき筆者作成)

日々の生活の中で仰ぎ眺め，校歌や民謡などの中に登場する白山は，地域性の象徴であり，石川県の人々にとって身近な存在である。このように白山を身近に感じる人々のもとで，白山信仰が浸透していないとは考えにくい。

白山信仰に関しては，下出(1999)では歴史的経緯が詳しく記されており，黒田(1990)では白山信仰の構造に関して詳しく記載されている。また，加賀国では 15 世紀に加賀の一向一揆があり，石川県は現在でも浄土真宗の信仰が色濃く残っている地域である。その加賀の一向一揆のあった中世後半の白山信仰の様子や，一向一揆と白山信仰に関しては由谷(2005)に詳しく記載されている。

白山信仰の歴史や構造，白山を開いたとされる泰澄の伝承，一向宗徒との関わりについてこれまで多くの研究にとりあげられている。しかし，白山信仰の地域的分布に関する研究は少ない。

白山信仰の分布に関して，田上(2007)では，中央日本の山岳にかかわる信仰施設の一つとして，白山神社が取り上げられている。田上(2007)では「全国神社祭祀祭礼総合調査(神社本庁，1995)」を利用して，主要な神社を抽出している。その中で白山神社は 2238 社あり，北陸の特に福井，濃尾平野を中心に関東にも広く分布している(図 2)。しかし，分布は明らかにされているが，分布の濃淡やその要因についての記載がない。

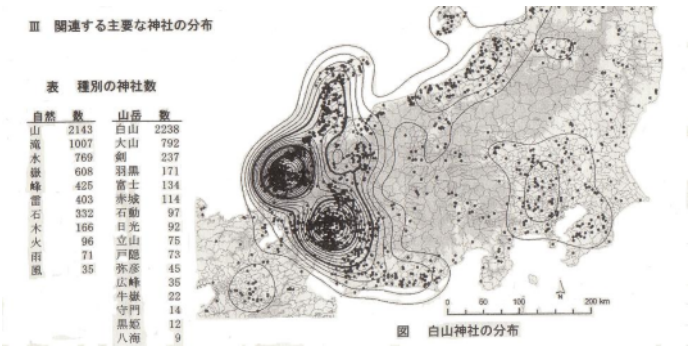

図 2：白山神社の分布

(田上 2007)

また，白山神社の分布に関するものでは，下出(1999,128－134)が，白山神社の全国分布と，白山神社の存在形態，村落神社の意義について論じている。村落神社の意義に関しては，その村落の住民たちが中心となって祭祀を行ってきたため，時の権力者の消長交替に影響されることなく，現在に至るまで存在している原因があるとしている。また，全国の神社分布については，全国各地に残る白山神社に関する史料から，その分布の要因を検証している。しかし，さらに詳細な地域的分布に関しては，その分布の要因について論じられていない。

そこで，本研究では，神社が神道の信仰に基づいて神々を祀るために建てられた建物であるものとして，白山神社を白山信仰を測るための一つの指標として用いることとし，さらに詳細な白山神社の分布を明らかにし，分布の要因について考察する。調査地域としては，石川県南加賀地域を選出し，その地域内での白山信仰の分布を明らかにし，分布の特徴とその要因について考察する。

調査地域である南加賀地域は，石川県加賀地方をさらに南北に分けた地域である。本研究でいう南加賀地域は，加賀市・小松市・能美市・白山市・川北町・野々市町とする(図 3)。これは，神谷(2007)においても用いられている地域区分である。

南加賀地域の南東部は白山山地を中心とした山地とこれに続く丘陵地であり，北西部は加賀平野と日本海に面した海岸砂丘が広がっている。加賀平野は，北方の手取川からなる扇状地と南方の沖積平野からなり，沖積平野内には潟湖が形成されている(図 4)。

図 3：南加賀地域

(筆者作成)

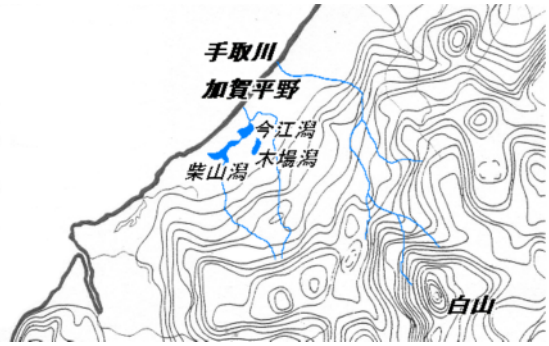

図 4：南加賀地域の地形

(岡山 1988 に筆者加筆)

山地の中心となる白山は(図 5)御前峰(2,702m), 大汝峰（2,684m），剣ヶ峰（2,677m）の三峰からなる主峰部と，南方の別山（2,399.4m）・三ノ峰(2,128m), 西方の白山釈迦岳（2,053.2m）などを合わせた総称である。主峰三峰を白山三峰と称し，これに別山・三ノ峰を加えて白山五峰という呼び方もある(若林ほか 1991) 。山頂は石川県南東部と岐阜県に位置し，山域は石川県白山市，岐阜県白川村・荘川村・白鳥町，福井県大野市・勝山市にまたがっている(図 5)。

白山は石川県の手取川水系，富山県の庄川水系の分水嶺であり，福井県の九頭竜川，岐阜県の長良川の水源ともなっている。

山地部からは手取川・梯川・動橋川・大聖寺川がいずれも北へ流れ，日本海へ注いでいる(図 6)。

手取川は，白山山系の大汝峰・御前峰・別山に源を発し，扇状地を西流して美川町から日本海に注いでいる。流長 72km，流域面積は 809km²で，水源地の保水力が乏しく増水と減水の変化が著しいのが特徴である (若林ほか 1991) 。

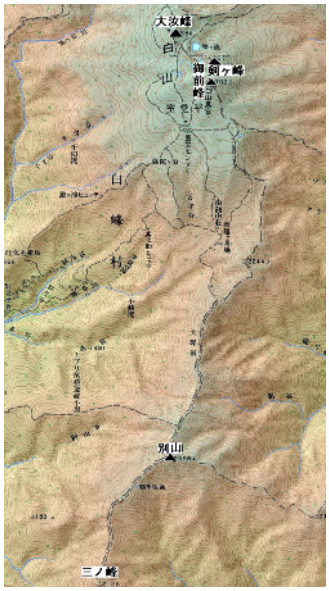

図 5：白山頂上付近

(カシミール 3D に筆者加筆)

図 6：調査地域の河川

(筆者作成)

この手取川によって形成された手取川扇状地が日本海に接している。手取川扇状地は加賀平野の主部に位置し，野々市町，白山市北部，川北町，能美市が含まれる。旧河道は七ヶ用水や宮竹用水などとして利用され，扇状地を灌漑し早場米の単作地帯が形成して，扇状地一帯が県内一の穀倉地帯となっている。梯川は流長 42ｋm，流域面積 271 km²の 1 級河川で，上流は鈴ヶ岳に源を発し，小松市安宅町から日本海に注ぐ。下流域には水稲単作を中心とする農

耕地が広がっている。動橋川は加賀市内を流れる川で流長 18.3km 流域面積 114.6km²の 2 級河川である。小大日山に源を発し，動橋町から柴山潟に注いでいる。大聖寺川も，加賀市内を流れる川で，流長 38km 流域面積 209km²の 2 級河川である。源を大日山の西斜面に発し，加賀市大聖寺を貫流し，塩屋港で日本海に注いでいる。下流部での蛇行が激しい。紙屋谷用水･市之瀬用水･鹿ヶ鼻用水などが開かれ，大聖寺川は農業用水として重要視されている。

南加賀地域には，加賀三湖といわれる 3 つの潟湖が存在する，すなわち，小松市の今江潟・木場潟，加賀市と小松市にまたがる柴山潟である(図 4)。現在では今江潟と柴山潟の一部は干拓され，農地として利用されている。

このように，南加賀地域は，白山を含む地域であり，さらに主要な 4 河川が流れる地域である。また，石川県側の白山信仰の拠点となった加賀馬場の白山比咩神社があり，さらに，加賀市と小松市は，中世に隆盛を誇った中宮八院・白山五院・三箇寺が存在していた地域である。これらのことから，南加賀地域では白山信仰の浸透度が強かったと考え，本研究では南加賀地域を調査対象地域として，白山信仰の分布状況を明らかにし，分布の特徴とその要因について考えることとする。

本研究では，まず，白山信仰の概要についてまとめ，次に石川県南加賀地域における白山信仰の分布状況を明らかにする。そこから南加賀地域における白山神社の分布の特徴の要因について，白山の可視性と八幡神社の分布という二つの視点から考える。

Ⅰ　白山信仰

1. 白山開闢と泰澄大師

白山は，その秀麗な山容から，古くから霊山信仰の聖地として仰がれた。山麓や遥かに御山を遠望できる平野部の人々にとって，白山は祖霊の宿る聖域であり，日々の暮らしに不可欠な飲料水や農耕の灌漑用水を供給してくれる神々の座であった。

また日本海を行きかう船人やそこで漁を営む人々からは，海上からの目印とされ，航海・漁撈の守護神とあがめられていた（東四柳 2003,8－9)。海との関係では,「古来日本海航行の船舶は帆を卸して通行するを例とせりと。」とある (石川郡自治協会 1927,674－679) 。

白山は，農耕神として，また航海の守護神としての性格を持ち合わせ，在地性に富んだ信仰の対象であった。生活の中で神仏の優劣や区別もなく，本能的に畏んで白山を仰ぎみることが在地での白山信仰の実情だった（下出 1977)。

このような白山への自然崇拝的な信仰は，養老元年(717 年)に泰澄大師が白山を修験の地として開いたことにより変貌を遂げる。泰澄大師は，霊亀 2 年(716 年)，夢で貴女の霊告を受け，翌年養老元年に白山を目指した。途中，貴女から白山の神が伊弉冉尊(いざなのみこと)で，今は白山妙理大菩薩と号すると知らされた。この後，白山頂上に登り，緑碧池の側で祈りをこめ，最初に九頭竜王，ついで白山妙理大菩薩の本地である十一面観音を拝した。次に左の孤峰(別山)で聖観音を本地とする小白山別山大行事と名乗る男神，右の孤峰(大汝峰)では本地を阿弥陀如来とする大己貴(おおなむち)と, 白山の三神をすべて拝した。そして，養老 3 年(719 年)まで山頂にとどまり，修行をしたという(下出 1999,17－20)。この後，白山信仰は奈良時代末からの神仏習合思想の現れと，その広まりにより，当初の在地の素朴な信仰から修験道としての山岳信仰として中央にも広がりをみせていくこととなる。神仏習合思想は，日本独自の神への信仰と仏教を融合させたもので，平安時代になって本地垂迹説に展開した。本地垂迹説とは，日本の神は，本来の姿である仏・菩薩（本地）が衆生救済のために姿を変えた，仮の姿（垂迹）であるとする神仏同体説である。白山修験では，山頂に 3 所の権現を立てた。主峰の御前峰には十一面観音を本地とする白山妙理大菩薩を，大汝峰には阿弥陀如来を本地とする大己貴を，別山には聖観音を本地とする小白山別山大行事を祀る社を立て，それらを白山三所権現としている。

2. 三馬場と禅定道

白山信仰では, 白山の頂上を禅頂と呼ぶ。禅頂とは,

もとは山の「絶頂」と仏教修行の極致の意味の「禅定」[2]との 2 つの語を重ね合わせた言葉である(黒田 1990)。具体的に禅頂とは白山山上の最高峰である御前峰のことである。

この御前峰までの登拝道のことを禅定道といい，その拠点となる地域を馬場という。馬場は「ばんば」と読み，一般には白山へ参詣するために馬に乗ってきた人でも，この地点からは馬から降り，いかなる人でも徒歩で登らなくてはならないと決められた場所のことである。

ただし，下出(1977)は，馬場とは，白山信仰の高まりにつれて増えてきた登拝者たちの集合地となった山麓の特定の場所を馬場といったので，必ずしも下馬地点とか，馬つなぎ場といった意味に限定する必要はないとしている。

この馬場は，石川県・福井県・岐阜県の 3 方面の手取川・九頭竜川・長良川のそれぞれの流域に天長 9 年(832 年)に併行して開拓されたとみられる(黒田 1990)(図 7)。

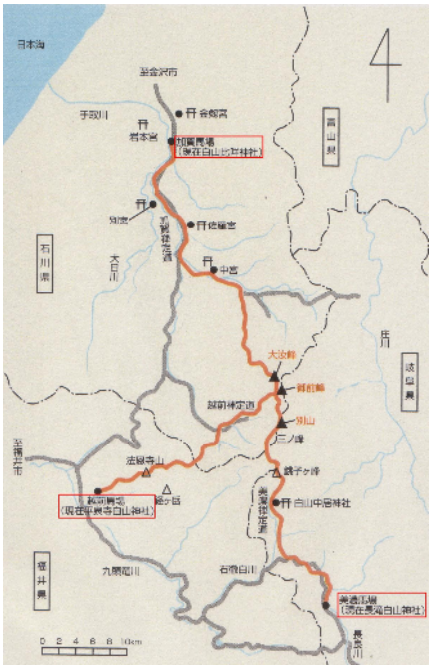

図 7：三馬場と禅定道

(小川 2001 に筆者が加筆)

石川県側の馬場は加賀馬場といい，その中心が白山本宮で現在の白山比咩神社である。加賀馬場からの禅定道(図 8)は，白山本宮から手取川渓谷に沿って別宮へ向かい，佐羅大明神を経て，瀬戸野から支流尾添川の左岸を遡る。途中，右岸に渡り笥笠中宮に詣でる。女人の参拝はここまでとされた。再び左岸に移り，加宝宮に詣で，祓谷の渓流を上り桧新宮に詣でる。そこからは尾根伝いに美女坂・天池・御手水鉢を経て，大汝峰に着き，最後に主峰の御前峰に登拝する。

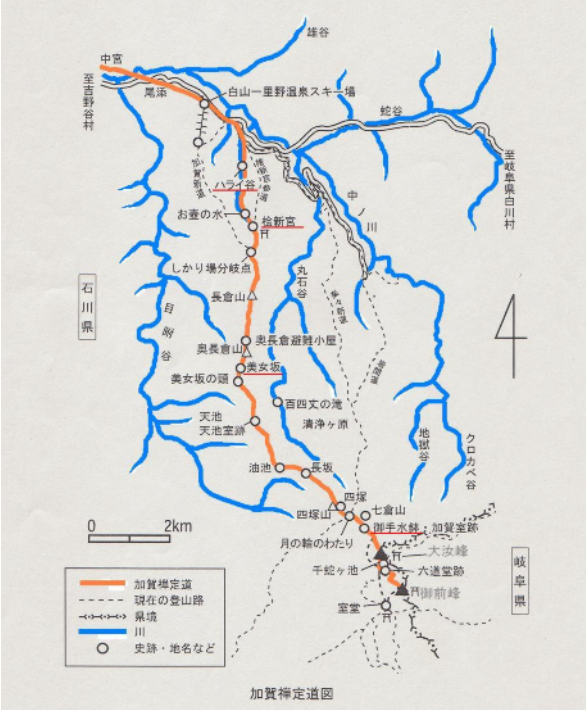

図 8：加賀禅定道

(小川 2001 に筆者が一部加筆)

福井県側の馬場は越前馬場といい，平泉寺が中心をなす白山中宮といわれたところで，現在は，平泉寺境内に白山神社が鎮座している。越前馬場を起点とする越前禅定道は白山の西南側から登拝し，小原村（現福井県勝山市）から，石川県の市之瀬へ着く。そこから険阻な道を登り，御前峰に直接登拝する。

岐阜県側の馬場は美濃馬場といい，明治の神仏分離までは長滝寺が中核をなしていたが，現在は白山神社が鎮座している。美濃禅定道は，長滝寺を起点とし，上在所の白山中居神社に詣でてから山に入る。一ノ峰・二ノ峰・三ノ峰を経て，別山にはいり，尾根伝いに登り，御前峰に登拝する(下出 1977)。

このように，加賀・越前・美濃の 3 方面から，それぞれ白山山頂の御前峰に通ずる禅定道があり，その拠点として馬場が開かれ，白山信仰の拠点となっている。

3. 南加賀の白山勢力

本研究の対象とする石川県南加賀地域には，加賀馬場が開かれ，石川県での白山信仰の中心をなしていた。この南加賀地域には，加賀馬場の白山本宮を含む白山七社と呼ばれる勢力が存在していた(図 3)。白山七社は，加賀馬場が久安 3 年(1147 年)に延暦寺末寺となったときに，比叡山の地主神である近江坂本の日吉七社の例にならって形成された(東四柳 2003)。

白山七社は，本宮系の本宮四社の本宮・三宮・金劔宮・岩本宮と，中宮系の中宮三社の中宮・佐羅宮・別宮に分けられる(図 9)。

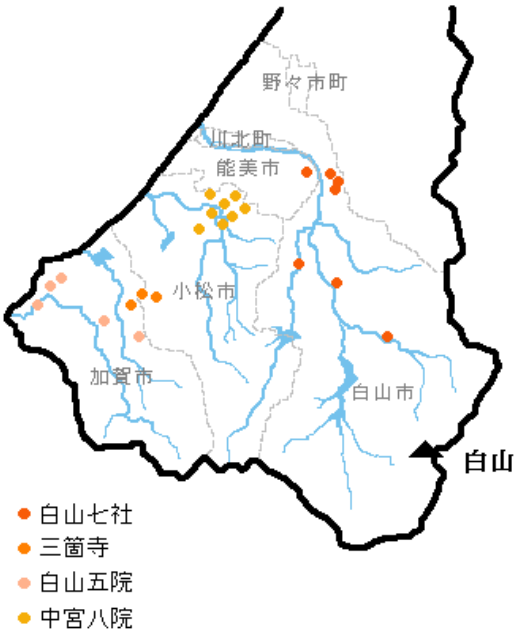

図 9：南加賀地域の白山勢力

(筆者作成)

本宮四社の中の本宮は，文明 12 年(1480 年)の大火で焼失し，現在は三宮の地に移っている。この本宮が現在の白山比咩神社である。12 世紀頃はこの本宮を含む 4 社よりも中宮の 3 社のほうが強大な勢力であった。

それを示すのが安元 2 年(1176 年)の事件である。この事件は，中宮別院の湧泉寺が加賀目代の焼き討ちにあい，中宮の佐羅宮がその謝罪を求め，京まで神輿を奉じ，ついに後白河法皇に強訴におよび，目代が処罰されたというものである。この頃，加賀国では「馬の鼻もむかぬ白山権現」といわれ，年貢を徴収するための土地の測量をする検注使でさえ，白山権現の支配地には自由に入れないほどであった(下出 1999,39－44)。

このほか，南加賀地域には中宮系の中宮八院・三箇寺と本宮系の白山五院があった(図 9)。中宮八院は現在の小松市に分布している。隆明寺，湧泉寺，善興寺，長寛寺，護国寺，昌隆寺，松谷寺，蓮華寺の 8 寺院である。三箇寺は，小松市と加賀市の市境に分布しており，那谷寺，湯谷寺，栄谷寺の 3 寺院である。白山五院は，現在の加賀市に分布しており，柏野寺，温泉寺，極楽寺，小野坂寺，大聖寺の 5 寺院である。しかし，ほとんどの寺院が現存しておらず，遺址が推測されるに過ぎない。那谷寺だけは現存しているが，現在の那谷寺は弘治元年(1555 年)に焼失したものを寛永 17 年(1640 年)に加賀藩主前田利常が再建したもので，三箇寺の頃からの継続された姿ではない。このように現在ではどの寺院も廃絶しているが，それらの遺称地には現在白山神社が鎮座している場合が多く，南加賀地域での白山信仰が隆盛を誇ったことを物語っている。

このように南加賀地域でも現在の加賀市，小松市，白山市の山間部においては白山寺院が勢力を誇り，白山信仰の浸透に影響を及ぼしていた。また，手取川扇状地には，白山宮の神領が多く分布していた(図 10)。

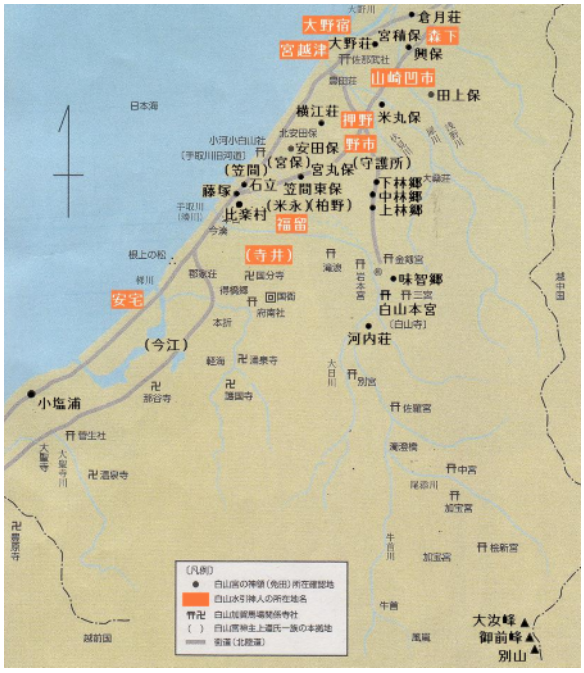

図 10：白山本宮の神領と白山水引神人の所在地

(東四柳 2003 に筆者が一部加筆)

南加賀の白山神領地は，林郷・宮丸保・河内荘などに多く分布している。さらに，手取川扇状地内では白山水引神人の所在地も多く確認されている(図10)。白山水引神人とは，水引という神輿や舞台の上部に横に張る幕を貢献することで，神社に奉仕し，その反対給付として商売上の特権を保護された人々のことで，藍染業者などがそれにあたっていた。このほかにも白山本宮に関係する神人には，白山麓の山内や河内に居住し，祭礼時の流鏑馬の練習用の的を負担する的神人をはじめ，競馬神人，師子神人，猿楽神人，毛馬神人，相撲神人，御油神人などがいた(東四柳 2003.pp24－25)。競馬神人などの所在地ははっきりしていないが，扇状地内には白山本宮との関わりの多い地域が多数存在していた。

以上のように，南加賀地域には加賀馬場と加賀禅定道だけでなく，白山七社・中宮八院・三箇寺・白山五院といった白山勢力の寺院，白山宮神領，白山本宮に奉仕する神人の所在地など，多くの白山信仰に関わる土地が存在し，南加賀地域が白山信仰と関わりの深い地域であったことを物語っている。

4. 白山比咩神社

石川県における白山信仰の中心となっているのが白山比咩神社である。白山比咩神社は石川県白山市三宮町に所在し，加賀一宮として県内外の人々から尊崇されている。由緒は神社のホームページ [3]に詳しく記載されているので，一部を紹介する。

明治期の神仏分離令により，加賀馬場の中心であった白山本宮白山寺が白山比咩神社となり，現在に至っている。この時白山比咩神社は国幣小社に列格され，大正 3 年，国幣中社に列格された(守部 1976,p214)。

祭神は白山比咩大神(菊理媛神)と伊弉諾神と伊弉冉神の三柱としている。ここで，疑問に思われるのが祭神の「菊理媛神」である。養老元年(717 年)の泰澄による白山開闢後は山頂には十一面観音と阿弥陀如来と聖観音の三所権現が祀られていたはずである。明治期の神仏分離令により仏教色が取り払われたといっても，「菊理媛神」の名前はどこから来たのかが問題視される。

山岸(1977)は，白山権現を菊理媛神とする説が有力となったのは，吉田神道が『一宮記』に，「白山比咩神社，下社伊弉冊尊，上社菊理媛，号白山権現。」と記したことに発するとしている。また，玉井(1985)は，泰澄が白山嶺上に祀ったのは高句麗媛で，「こうくりひめ」の発音が「ククリヒメ」と転訛したものが「菊理媛」だとしている。このように，「菊理媛神」に関しては諸説あるが，本研究では，総社である白山比咩神社の祭神に基づいて白山神社を抽出しているため，現在，白山比咩神社に白山比咩神として菊理媛神が祀られているという事実が重要であるので，「菊理媛神」の由来については深く言及しない。

Ⅱ　白山神社の分布

1. 全国の白山神社分布

現在「白山神社」の社名を有する神社は全国に 2716 社存在しているとされる(表 2,図 11)。

表 2：全国の白山神社数

岐阜県	福井県	新潟県	愛知県	石川県	富山県
525	421	231	220	156	106
埼玉県	長野県	群馬県	秋田県	山形県	静岡県
102	96	93	86	76	56
千葉県	栃木県	福島県	茨城県	東京都	宮城県
53	44	42	41	40	30
滋賀県	岩手県	三重県	山梨県	福岡県	神奈川県
27	27	26	25	22	21
奈良県	徳島県	佐賀県	京都府	熊本県	兵庫県
15	14	12	11	11	10
青森県	大分県	和歌山県	高知県	鹿児島県	大阪府
9	9	7	7	7	6
長崎県	山口県	愛媛県	鳥取県	香川県	島根県
6	6	6	4	3	2
岡山県	広島県				
2	2				

資料：下出(1999)

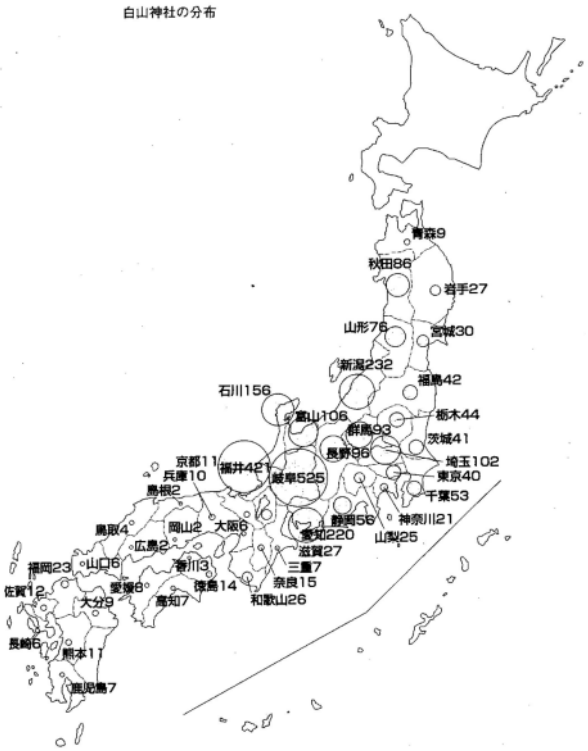

図 11：全国の白山神社分布

下出(1999,p.126)

下出(1999,128－134)によれば，岐阜県で 525 社と最も多く，次いで福井県の 421 社，新潟県の 231 社と愛知県の 220 社，石川県の 156 社，富山県の 106 社，埼玉県の 102 社と続く。白山神社は，岐阜県や福井県など，白山を囲む地域を中心に多く分布している。西日本では滋賀県の 27 社が一番多く，次いで和歌山県の 26 社，福岡県の 23 社と分布が 30 社を超える府県が存在せず, 全体的に白山神社の分布は少ない。逆に，東日本では埼玉県の 102 社をはじめ，長野県が 96 社，群馬県が 93 社と 50 社以上の白山神社が存在する県が多くあり，西日本に比べ白山神社が多く分布している。図 11 では北海道には白山神社が存在していないことになっているが, 北海道でも 9 社の白山神社が確認されている (橋本 2003)。全国に分布している白山神社のうち，東海地方の 800 余社をはじめ，甲信から関東にかけての約 500 社は，美濃馬場の長滝寺に関わりの深いものであり，越前の約 400 社を中心に，近畿などの西日本の約 100 社は越前馬場の平泉寺につながりの深いもので，加賀以北の約 500 社と奥羽地方の約 200 社が加賀馬場の白山寺の系統に含まれるものとされる(下出 1999,123‐134)。

下出(1999)は，全国の『神社明細帳』により，白山神社の数を算出している。本研究では,『石川県神社誌』(守部 1976)を用い,「白山神社」と号する神社を一つずつ抽出した。その結果，下出(1999)で取り上げられている石川県の白山神社数の 156 社を超え, 247 社を数えている(表 3)。

表 3：石川県の白山神社数と八幡神社数

	白山神社数	八幡神社数	神社総数
加賀市	45	19	136
小松市	37	47	153
能美市	1	37	71
川北町	2	1	15
白山市	21	53	187
野々市町	4	9	27
金沢市	19	92	320
内灘町	0	1	5
津幡町	12	22	70
かほく市	4	11	38
宝達志水町	11	5	51
羽咋市	4	13	55
中能登町	5	5	48
志賀町	12	13	112
七尾市	16	21	162
輪島市	17	39	211
能登町	14	6	95
珠洲市	10	7	79
計	247	405	1,894

資料：『石川県神社誌』(守部 1976)

(筆者作成)

2. 南加賀地域の白山神社分布

石川県内における白山神社の分布と神社総数に占める割合について市町村別にみる。本研究では,『石川県神社誌』(守部 1967)に記載されている神社を市町村別にすべて数え，その中からさらに,「白山神社」と号する神社を抽出し，それぞれの市町村ごとに割合を出した(表 3)。

その結果，能登地方では，白山神社の割合がほとんどの市町村で 10%前後と低い割合になっている。宝達志水町だけが 21%と少し高い値を示している。

加賀地方では，加賀市が 33%，小松市が 24%と群を抜いて高く，県内においても加賀市は最も白山神社の率が高い。小松市と加賀市の 2 市は，ともに南加賀地域に含まれ，南加賀地域は県内でも特に白山神社の多い地域であることがわかる。

次に，その詳細な分布図を作り，分布の特徴を探る。まず，『石川県神社誌』(守部 1976)に記載の全 1894 社から，白山神社を抽出した。本研究では，白山神社の総社である白山比咩神社に，主祭神として白山比咩神(菊理媛神)が祀られていることに基づき，守部(1976)の中で，社名に「白山神社」「白山社」とある神社 [4]，また，白山神社という社名を用いていなくとも主祭神に「菊理媛神（菊理姫神・菊理比売神・菊理毘売神・菊理媛命・菊理姫命・菊理比売命・菊理毘売命・菊理媛尊・菊理姫尊・菊理比売尊・菊理毘売尊）」または「白山比咩神（白山姫神・白山比咩命）」の名前がある神社を「白山神社」としている。その他，主要建物の記載の中に「白山社」がある神社，または，由緒に白山社を合祀したという記述や白山社に関係していると思われる記述がある神社も「白山神社」に含めた。また，筆者自身の現地調査中に発見した白山神社に関する神社や祠や堂，地図上で発見した白山神社についても「白山神社」として数えている(表 4)。その「白山神社」をすべて，5 万分の 1 地形図に逐一プロットした(図 12)[5]。

白山神社の分布は加賀平野のほとんどの地域でみられ，山間部においても多く神社分布がみられる。

南加賀全域で白山神社の分布がみられる中で，特に分布が集中しているのが加賀市と小松市，白山市の平野部（旧松任市・美川町・鶴来町）である。加賀市では，白山神社数は 60 社あり神社総数の約 4 割を占める。また，山中町などの山間部でも少数ではあるが，分布がみられる。小松市では，白山神社数は 68 社で，加賀市と同じく約 4 割を白山神社が占めている。尾小屋町，大杉町といった山間部での分布も多い。白山市では，白山神社数は 48 社であり，全体の 26%となっている。市内でも平野部での分布が多い。

それに対して分布が少ないのが能美市である。能美市では，神社の総数 71 社に対して，白山神社数は，岩本町，小杉町，大口町，長瀧町，鍋谷町，新保町，中ノ江町，和佐谷町の 8 社だけである。その中でも「白山神社」と号する神社は大口町の 1 社だけである。このうち，岩本町，大口町，長滝町，鍋谷町，和佐谷町は，能美市内でも比較的白山比咩神社に近い地域である。

その他，川北町では，神社の総数 15 社に対して，白山神社数は 3 社で，そのうち「白山神社」と号する神社は 2 社である。

野々市町では，神社の総数 27 社に対して，白山神社数は 6 社で，そのうち「白山神社」と号する神社は 4 社である。

以上のことから，南加賀地域における白山神社の分布は一様ではなく，偏りがあることがわかる。すなわち，加賀市，小松市，白山市の平野部では白山神社の分布が濃密であるのに対し，能美市では平野部においても白山神社が非常に少なく，白山神社の分布が希薄である(図 12)。

表 4：南加賀地域の白山神社数

加賀市	総数	136
	白山神社数	60
	うち「白山神社」と号する神社数	45
小松市	総数	154
	白山神社数	68
	うち「白山神社」と号する神社数	38
能美市	総数	71
	白山神社数	8
	うち「白山神社」と号する神社数	1
川北町	総数	15
	白山神社数	3
	うち「白山神社」と号する神社数	2
白山市	総数	187
	白山神社数	49
	うち「白山神社」と号する神社数	22
野々市町	総数	27
	白山神社数	6
	うち「白山神社」と号する神社数	4

資料：『石川県神社誌』(守部 1976)

(筆者作成)

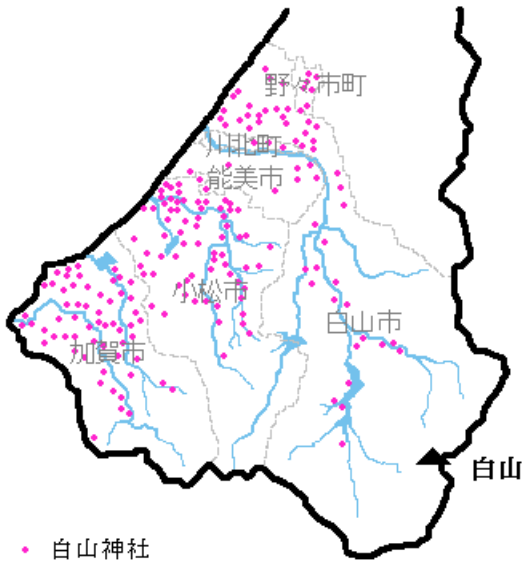

図 12：南加賀地域の白山神社分布

(筆者作成)

Ⅲ　白山神社分布の特徴

1. 白山の可視性

このような白山神社の分布の偏りを説明する因子の一つとして，神体としての白山が見えるか見えないかということが，白山神社の分布に影響を及ぼす可能性がある。そこで，この章では白山信仰と白山の可視性の関係について検証する。

白山信仰のもともとの形が，白山そのものを崇める信仰であったと考えられることから，白山の可視性が白山信仰の分布に影響を与えていると考えられる。また，山岸(1985)は，白山が愛知・岐阜からも，さらに遠くの京都・奈良・滋賀・三重からも見え，その清く美しい姿が山岳の神秀たるにふさわしく，このような条件が白山を修験の全国的神山にしていると述べており，これらの地域に広がる白山神社から白山が遠望できることを示唆している。また，全国的な白山神社の分布をみても，岐阜県・福井県・愛知県など白山が見える地域に多く白山神社が存在していることが分かる(図 11)。

そこで，本研究では南加賀地域という狭い範囲内においても，白山神社の分布と白山の可視性に関係があると仮定し，南加賀地域における白山の可視性と白山神社の分布の偏りの関係について検証する。

白山の可視性を具体的に検証する方法として，カシミール 3D[6]を用いて，先にプロットした南加賀地域の各集落の白山神社すべてから白山頂上(御前峰)までの可視性を調べた(図 13)。

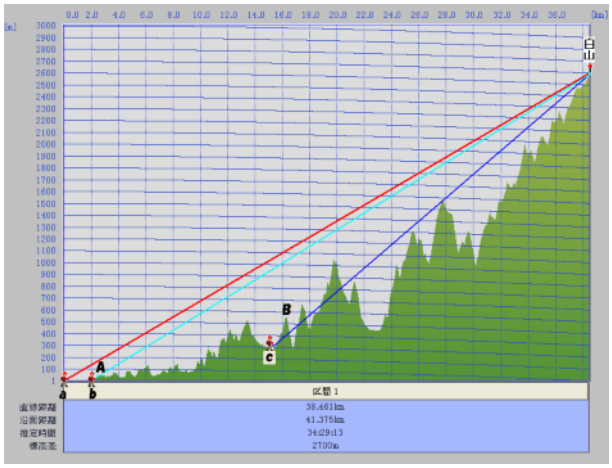

図 13：カシミール 3D による方法

(カシミール 3D による見通し図に筆者加筆)

それぞれの白山神社から白山山頂に向けて見上げたとき，図 13 の地点 a のように，白山が他の事物(低山など)に邪魔されず直接見える地点と，地点 b のように近くにある低山 A のために視野をふさがれ，直接には白山を仰げない地点，また，地点 c のように白山に近い地域でも山 B などの高い山々に阻まれ，白山が見えない地域とが存在する。つまり，遠距離ではなくとも，直近の地域においても白山を見ることのできる地域とできない地域が存在する。この作業の結果，白山が見える地域と白山が見えない地域の境界線を引くと図 14 のようになる。

この図から，調査地域の南加賀地域では，加賀平野の平野部全域から白山を仰ぎ見ることができることがわかる。しかし，平野から山地側に近づくにつれて白山は見えにくくなり，山間部に入ると手前に存在する低山のため白山を仰ぎ見ることができなくなることがわかる(図 13)。

これらのことから，白山の可視性と白山神社の分布との二因子から調査地域を 4 つのカテゴリーに区分することができる(図 14)。

①　白山が見えて，白山神社がある地域。

加賀市・小松市の平野部，能美市を除く手取川扇状地

②白山が見えず白山神社がない地域。

加賀市・小松市・白山市の山間部。

③白山が見えないが白山神社がある地域。
　加賀市山間部，小松市山間部，白山市の山間部。
④白山が見えるが白山神社がない地域。
　加賀市と小松市の市境と能美市。
　これら 4 地域から白山神社の分布と白山の可視性との関係について考える。

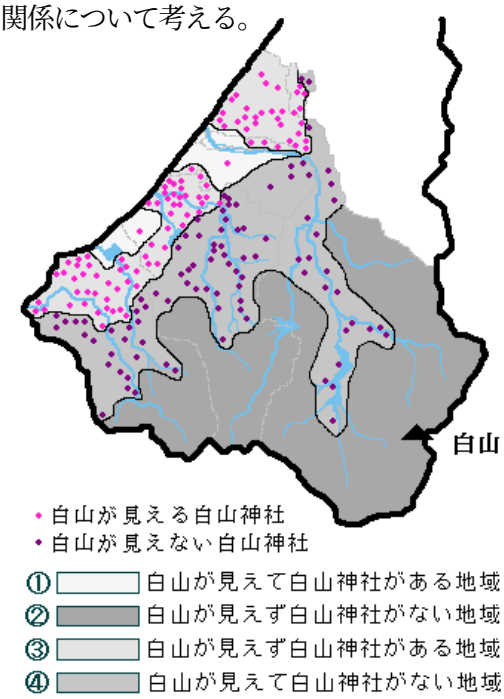

図 14：白山の可視性

(筆者作成)

2. 4 地域における白山の可視性と白山神社の分布の関係

1)①の地域　白山が見えて白山神社がある地域

この地域は加賀市・小松市の平野部，能美市を除く手取川扇状地(白山市平野部・川北町・野々市町)である(図 14)。加賀市・小松市の平野部からは特に白山がきれいに見える。白山連峰が一望でき，白山の禅頂である御前峰を仰ぎ見ることができる。

　この地域は白山神社の分布と白山の可視性に関係がみられる。白山市の平野部や，川北町，野々市町では，白山の可視性だけでなく，11 世紀ごろ，白山の神領があったことなどが白山神社の勧請に影響を及ぼしている可能性がある(図 4) 。また，小松市の平野部においては白山市の平野部などと同じく，安宅町が白山神領であり，白山水引神人の所在地であったことが影響していると考えられる。加賀市の平野部では白山五院の影響が考えられる。とはいえ，この地域では，白山の可視性が白山信仰の浸透の要因の一つであったと考えられる。

2)②の地域　白山が見えず白山神社がない地域

この地域は，加賀市・小松市・白山市の山地部である。この地域は，ほとんどが山地部で集落がほとんど存在しない地域であるため，白山神社以外の神社もまた存在しない地域にあたる。数少ない中のいくつかの集落においては，八幡神社など白山神社以外の神社が勧請されている場合もみられる。しかし，例が少なく白山神社と白山の可視性について検証する対象になりにくい地域である。

3)③の地域　白山が見えないが白山神社がある地域

この地域は，加賀市・小松市・白山市の山間部である。この地域では，山間部に集落があり，ほとんどが白山手前の低山のため白山を見ることができない。また，山裾に位置しているために背後にある白山が見ることのできない地域もある。白山市では加賀禅定道沿いに神社が分布しているが，禅定道自体が山間にあるので，禅定道沿いの集落からは白山を見ることが出来ない。白山七社が分布していることから，それらの影響により白山神社が分布しているとも考えられる。また，加賀市や小松市においても，白山五院や三箇寺，中宮八院といった白山勢力が分布していた。すなわち，この地域では白山の可視性は白山神社の分布には関わりがなく，むしろ，白山山頂までの禅定道沿いであったことや，白山勢力の影響が大きく関わっていると考えられる。

4)④の地域　白山が見えるが白山神社がない地域

この地域は，加賀市・小松市の市境と能美市に位置している。加賀市・小松市の市境からの白山は県内でも特に美しく見える場所である。白山までの見通しもよく，はっきりとした白山の姿を遠望できる。しかし，この地域は，海岸砂州に閉ざされてできた後背湿地や加賀三湖の柴山潟や今江潟が広がっていた地域で，集落が分布していない地域である。現在では潟の 1952 年から 1969 年の干拓事業により，農地として利用されているが，集落はほとんど分布し

ていない。このため，この地域では神社が造られることもなかったものと考えられる。

しかし，能美市の場合は，市域が手取川扇状地左岸の低平地であり，右岸の川北町と同様に集落も多く存在している。白山もよく見える地域で，特に旧根上町では，中世に，根上の松が白山の遥拝所とされていたほどで，白山が美しく遠望できる地域である。また，市域の東側には白山七社の一つである岩本神社があり，市の中心部の寺井町は中世に，白山水引神人の所在地であり，白山宮神主・上道氏一族の本拠地であった。このように，能美市は白山信仰との関わりの深い土地であったにも拘わらず白山神社はほとんど分布していない。つまり，能美市は白山勢力の影響や白山の可視性との関係があってもおかしくない地域であるにも拘わらず，白山神社がほとんど存在しない特殊な地域である。この事については次章で検証する。

以上のように，①の地域では白山信仰の浸透に白山の可視性が関係している可能性が見出せる。③の地域については可視性との関係はみられないが，白山勢力や，禅定道であったことが白山信仰の広まりに影響していると考えられる。しかし，④の地域の能美市のように白山の可視性や白山勢力の影響が考えられる地域にも拘わらず，白山神社の分布が希薄な地域も存在する。

3. 南加賀地域の八幡神社の分布

前節で白山神社分布の偏りを説明する一因子として白山の可視性について検証したところ，白山の可視性があるにも拘らず白山神社の分布がほとんどみられない地域があることがわかった。それは，能美市である。この地域は，集落の分布も多く，白山勢力の影響も考えられる地域であるにも拘わらず白山神社がほとんど分布していない。

その理由の一つとして，まず考えられるのが，白山神社の総社である白山比咩神社に南加賀地域内でも, 比較的近い位置に市域があることが考えられる。つまり，各町村に白山神社を勧請しなくとも，白山比咩神社へ直接参詣にあがることができる。そのために，白山神社を勧請している集落が少ないとも考えられる。しかし，このような白山比咩神社との距離だけでは，手取川の対岸の地域の川北町や白山市平野部における白山神社の分布の多さの説明がつかない。川北町や白山市平野部は能美市と同じく白山勢力の影響もあった地域で，白山比咩神社までの距離についても，能美市とほとんど変わらない。にもかかわらず，能美市においては白山神社の分布が川北町や白山市平野部に比べて極めて少ない。

そこで，この章では南加賀地域の白山神社以外の神社の分布について調べ，能美市での白山神社の分布の希薄さの要因について検証する。白山神社以外の神社として，全国的にも広く分布しており，石川県内でも 405 社と一番多い八幡神社を取り上げる(表 3)。この八幡神社の分布が能美市における白山神社の希薄さに関係していると仮定し，能美市における白山神社の分布の希薄さについて検証する。

八幡神社の分布を明らかにするために,『石川県神社誌』(守部 1976)に記載の全 1894 社から八幡神社だけをすべて抽出した。本研究では,『石川県神社誌』(守部 1976)の中で, 社名に「八幡神社」とある神社, また，八幡神社という社名を用いていなくとも主祭神に「応神天皇」または「誉田別尊(誉田別命・品陀和気命・誉田和気尊・誉陀別尊・誉牟多和気神・誉田別皇命・大鞆和気命)」「八幡神(正八幡神・護国八幡神・八幡大神)」の名前がある神社を「八幡神社」としている。その他に，主要建物の記載の中に「八幡社」がある神社，または，由緒に八幡社を合祀したという記述や八幡社に関係していると思われる記述がある神社も「八幡神社」として数えている(表 5)。それらを，すべて 5 万分の 1 地形図に逐一プロットした(図 15)。

南加賀全域で八幡神社の分布がみられる中で，特に集中しているのが小松市と能美市，野々市町である。小松市では，八幡神社は 73 社で，全体の 47%と市内の神社の半数近くが八幡神を祀っている。しかし, 白山神社も 44%とほぼ同じだけの割合を占めている。小松市北部での分布が目立ち，古府町付近と粟津温泉付近での分布が特に多い。能美市では, 八幡神社数は 49 社で，市内の神社の 70%近くを八

幡神社が占めており，南加賀地域でも群を抜いて多い。能美市内でも，特に旧辰口町・旧寺井町での分布が多い。白山市では，八幡神社は 74 社で，白山市内の神社の約 4 割を占める。特に市内でも旧松任市付近と旧鳥越村での分布が多い。野々市町での八幡神社は 13 社で，全体の 48%と半数近くに及ぶ。これは能美市に次いで高い割合である。

それに対し，分布が少ないのは加賀市・川北町である。加賀市では八幡神社の割合は 23%と少なく，白山神社の割合（44%）よりも少ない。これは南加賀地域でも少ない部類に入る。川北町では，神社の総数 15 社に対して，八幡神社は 1 社だけで，三反田八幡神社のみである。手取川対岸の能美市での分布とは対照的に非常に八幡神社の少ない地域である。

表 5：南加賀地域の八幡寺神社数

加賀市	総数	136
	八幡神社数	32
	うち「八幡神社」と号する神社数	19
小松市	総数	154
	八幡神社数	73
	うち「八幡神社」と号する神社数	47
能美市	総数	71
	八幡神社数	49
	うち「八幡神社」と号する神社数	37
川北町	総数	15
	八幡神社数	1
	うち「八幡神社」と号する神社数	1
白山市	総数	187
	八幡神社数	74
	うち「八幡神社」と号する神社数	53
野々市町	総数	27
	八幡神社数	13
	うち「八幡神社」と号する神社数	9

資料：『石川県神社誌』(守部 1976)

(筆者作成)

図 15：南加賀地域の八幡神社分布

(筆者作成)

このように八幡神社の分布にも白山神社同様，偏りがみられる。この八幡神社の分布と前述の白山神社の分布とを重ね合わせたものが図 16 である。

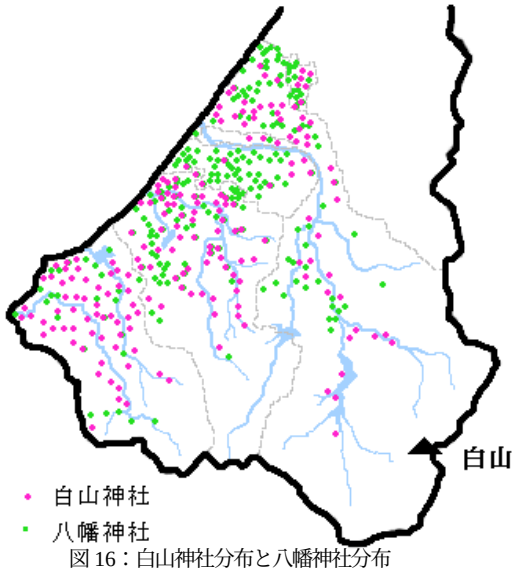

図 16：白山神社分布と八幡神社分布

(筆者作成)

これを見ると，白山神社の分布の少なかった能美市で，八幡神社が数多く分布していることが分かる。近隣の市町村の小松市北部や川北町に比べ，白山神社と八幡神社の分布の差がはっきりしている。また，八幡神社の割合と白山神社の割合を比較してみる。八幡神社の分布の多かった地域では，小松市が八幡神社の割合が白山神社の 1.0 倍，白山市が 1.5 倍，野々市町では 2.1 倍であり，差がほとんどない。そ

れに比べ，能美市では，八幡神社の割合が白山神社の 6.2 倍であり，他の八幡神社が多く分布する地域よりも，八幡神社がより集中している地域であることが分かる。逆に，白山神社が多く分布している地域において割合を比べてみると，白山神社の多く分布する加賀市では白山神社の割合が八幡神社の割合の 1.9 倍であり，それほど差がない。つまり，能美市だけが白山神社の割合と八幡神社の割合とに大きな差がある地域だといえる。

さらに，白山の可視性の地図を重ね合わせると図 17 のようになる。すなわち，白山の可視性がありながら白山神社が無かった地域である能美市に八幡神社が非常に多く分布していることが分かる。

これらのことから，能美市においては，白山の可視性があるにも関わらず，白山神社の分布がほとんど無かった理由の一つとして，八幡神社の存在が重要視される。

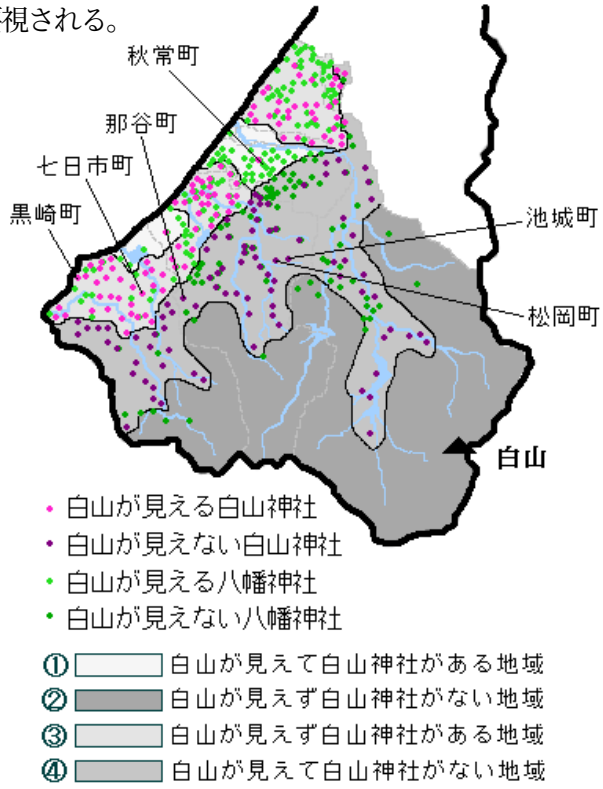

図 17：白山神社分布と八幡神社分布

(筆者作成)

4. 八幡神社分布と白山神社

それでは，能美市ではなぜ白山神社ではなく八幡神社が多く勧請されているのか。この地域における八幡神社の一つ, 能美市秋常町の八幡神社を取り上げ，その由緒にから検討してみたい。

『石川県神社誌』(守部 1976,p175)によれば,

八幡神社　旧村社

能美郡寺井町秋常チの 86

主祭神　　応神天皇　神功皇后　比咩大神

例祭　　9 月 16 日

境内地／主要建物　　854 坪　本殿・拝殿・神明社・稲荷神社

由緒　　創立年月不詳。古昔春日部の社で，春日神社と称していた。御社殿は宮守山に囲まれ，要害の地に鎮座している。<u>また当区は石清水古文書に秋恒の名称がある。同宮の御料田であったところで八幡神社を勧請。</u>文久年間春日神社と合併。八幡神社と称し，明治 41 年無格社八幡社を合併。同年神饌幣帛料供進神社に指定された。(下線は著者加筆)

この由緒の中で，注目すべき点は下線部の箇所である。秋常町は石清水八幡宮の御料田があったところで，そのために八幡神社を勧請したとしている。このほかにも『石川県神社誌』(守部 1976)の中の，能美市内の八幡神社のうち 15 社の由緒に同じように, 社地のある地区がかつて石清水八幡宮領であり，そのために八幡神社を勧請したのだと，述べられている。

現在の能美市の地域は，中世は郡家荘(板津荘)・能美荘のあったところである(浅香 1993,図 18)。

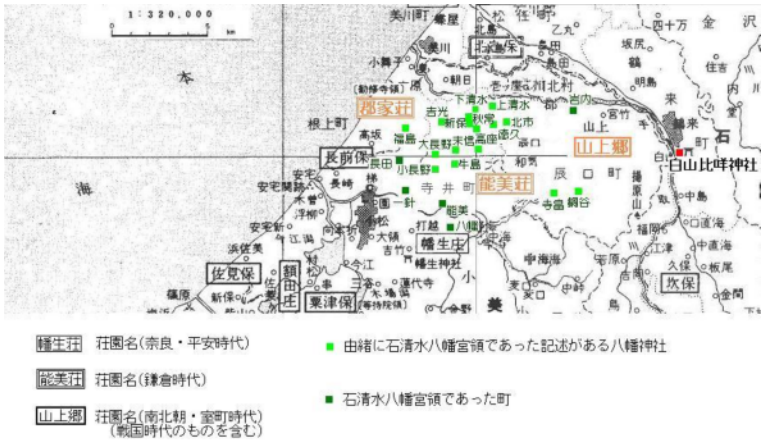

図 18：能美市の荘園分布

(竹内 1975 に筆者加筆)

郡家荘は能美平地の北西部，現在の小松市の北端部から旧根上町・旧寺井町(図 18)にかけての低湿地帯が荘域であった。郡家荘は嘉応 3 年(1171 年)に初見

する荘園で，宝治元年(1247 年)には勧修寺領として現れている(浅香 1993)。

能美荘は能美平地の東部から北東部にかけて荘域が分散し，南部は能美惣荘と呼ばれ，現在の小松市街東郊の八幡町・能美町から北東郊の一針町・長田町にかけて梯川の両岸の湿地帯に南北に連なっている。北部は郡家荘を隔てて北東方の旧寺井町東部に能美荘重友保が位置し，その北東の手取川下流南岸に沿って旧辰口町北西部に能美荘山上郷，岩内町付近には能美荘岩内保があった。能美荘は建久 2 年(1191 年)に長講堂領として初見する。能美荘内の重友保・山上郷・岩内保はもともと，それぞれ別個の領有単位をなしていたが，応永 14 年(1407 年)までに能美荘に含められている。石清水八幡宮による領有は，文永 6 年(1269 年)に初見し，永禄 12 年(1569 年)までの約 300 年間にわたる(浅香 1993)。正長元年(1428 年)には能美荘内の山上郷も室町幕府下知状で石清水八幡宮に寄進されている(浅香 1987,111－113)。

このように，能美荘は室町時代には石清水八幡宮領となっていたため，荘園領主である石清水八幡宮の影響で，八幡神社の分布が多いと考えられる。能美荘が現在の能美市内の旧辰口町や旧寺井町の 2 町の町域とほぼ重なることから，特にこれらの地域での八幡神社の分布が目立つものと考えられる。

この場合，八幡神社の多く分布する地域と白山神社の希薄な地域が重なることは，荘園領主である石清水八幡宮によって，白山神社の勧請が制約された可能性を考えるのが妥当である。しかし，他の石清水八幡宮領においても同様に白山神社の勧請が制約されたのかどうか，また，能美市においては相殿社としての白山社も少なく，その理由については，神社の由緒やそれぞれの町史などを調べてみたが，明らかになっていない。その上，石川県における荘園の分布は十分に明らかになっているわけではなく，それを調べるための石川県の荘園に関する史料も極めて希薄である(浅香 1993)。このため，ここでは十分に検討することができなかった。

Ⅳ　聞き取り調査

前章で①の地域から，白山信仰と白山の可視性に関係があると考えられた。しかし，④の地域のように，白山の可視性がありながらも白山神社の分布がみられない地域もあった。

前章までは，白山神社の分布と白山の可視性により白山信仰の分布を考えたが，この章では白山信仰と白山の可視性の関係にさらに踏み込んだ検討を行うため，実際に①・③・④の地域の住人から聞き取りを行なった (表 6,図 17)。

表 6：聞き取り調査地域

	加賀市七日市町	加賀市黒崎町
人口	176	459
世帯数	50	128
白山神社	○	○
白山の可視性	○	○
御前峰までの距離	40.2km	47.6km
白山比咩神社までの距離	27.0 km	32.6km

資料：人口・世帯数 (2008 年 1 月)

http://www.city.kaga.ishikawa.jp/article/ar_detail.php?ev_init=1&arm_id=101-0159-7097

	小松市池城町	小松市松岡町	小松市那谷町
人口	3	77	785
世帯数	2	22	233
白山神社	○	○	○
白山の可視性	×	×	×
御前峰までの距離	29.5km	30.1km	36km
白山比咩神社までの距離	12.7km	13.4km	23.5km

資料：人口・世帯数 (2008 年 1 月)

http://www.city.komatsu.ishikawa.jp/kakuka/soumu/tokei/tyoubetu.asp

	能美市秋常町
人口	318
世帯数	89
白山神社	×
白山の可視性	○
御前峰までの距離	39.7km
白山比咩神社までの距離	10.7km

資料：人口・世帯数 (2005 年 10 月)

http://www.city.nomi.ishikawa.jp/cgi-bin/odb-get.exe(筆者作成)

①の地域として加賀市七日市町・黒崎町，③の地域として小松市池城町・松岡町・那谷町，④の地域として能美市秋常町で，それぞれ聞き取りを行ってきた。

1. 加賀市七日市町・加賀市黒崎町の事例」
(①白山が見えて白山神社がある地域)

(図 19・20・21)

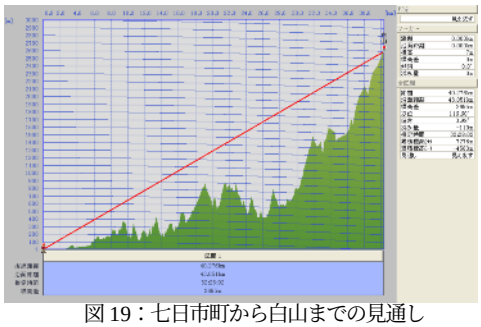

図 19：七日市町から白山までの見通し

(カシミール 3D を用いて筆者作成)

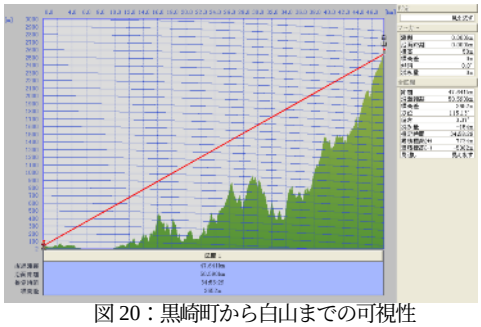

図 20：黒崎町から白山までの可視性

(カシミール 3D を用いて筆者作成)

図 21：七日市町付近から望む白山

加賀市七日市町では A 氏と B 氏(70)に聞き取りを行った。

七日市町の白山神社で行われている行事は, 現在, 年に 5 回である(表 8)。1 月 15 日の新年祭，3 月 14 日の春祭，6 月下旬には大祓いが行なわれる。8 月 14 日に秋祭が行なわれ, この祭は春祭よりも大きな祭で，神主が来てお参りするだけでなく，青年団による獅子舞や, 2007 年から始められた子ども神輿などが催される。11 月下旬の新穀感謝祭は農家の人々が中心となって行なっている。その他に，白山神社に詣でるのは厄まいりの時である。また，神社掃除は年に 3 回老人会で行っている。

他に，浄土真宗の行事として，一厘講，若衆講，親父講，尼お講などがある。A 氏は，白山は霊峰白山だと思っているそうである。

B 氏によると町内の白山神社からは白山が見え，冬至の頃には白山の峰から御来光が見られるそうである。家の近くを流れる動橋川は，直接白山から流れる水ではないかもしれないが，白山の麓から流れる水として，白山連峰から流れる水だと思って感謝しているとのことである。「天気がよければ必ず白山が見られることから，信仰と言うほどのものはなくても，自然崇拝に近いようなことは感じている。」とのことである。また，このあたりで農業をする人は皆そう思っているのではないだろうかということである。

加賀市黒崎町では C 氏(62)と D 氏(60)に聞き取りを行った。

黒崎町の白山神社で行われている行事は，元旦祭をはじめ 9 回である(表 9)。秋祭が町内で一番大きな祭で，神主によるお祓いや農作物の奉納以外に獅子舞も出る。以前は，神社掃除を毎週日曜日に行っていたそうだが，現在では子ども会で年に 1 度行っているそうである。神社の中の掃除は祭の前日に区長と神社総代が行っている。祭は町内の白山神社で行っているが，神主の話などは伊勢神宮系列と思われる話ばかりで，白山信仰と関係あるのか分からないそうである。C 氏は「白山は雄大で，信仰の山であり, ふるさとの山だと思っている。」と言っていた。

D 氏の話では小正月に小豆粥を作り，柿木に鎌を切りつけ「なるかならぬか言うてみよ。」と言い,「なる，なる」と答えたら，小豆粥を切り口にかけるという行事を行っていたそうである。また，尼お講や若衆講を行っていて，「もっそめし」を作るという。

この地域では，地域の中を流れる川が白山からの恵みとして捉えられている。この地域を流れる川は，直接白山を水源としていないが，白山に連なる山か

らの恵みとして，地域住民は白山からの恵みだと感謝している。このように地域住民が感じているのは，白山が直接目に見えるからだと考えられる。

2. 小松市池城町・小松市松岡町・小松市那谷町の事例

(③白山が見えないが白山神社がない地域)

(図 22・23・24・25)

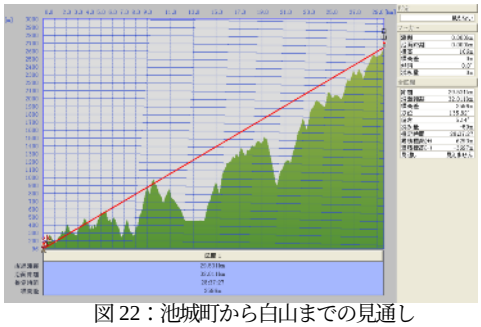

図 22：池城町から白山までの見通し

(カシミール 3D を用いて筆者作成)

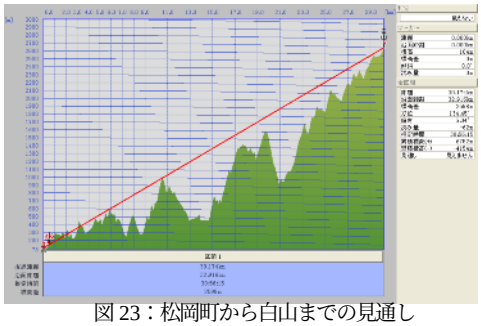

図 23：松岡町から白山までの見通し

(カシミール 3D を用いて筆者作成)

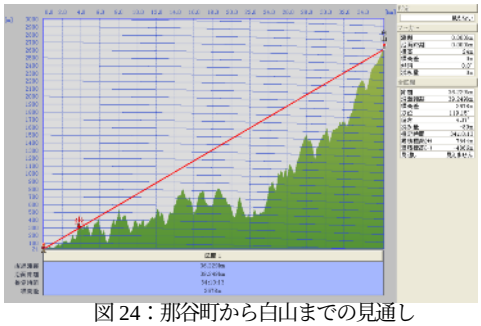

図 24：那谷町から白山までの見通し

(カシミール 3D を用いて筆者作成)

図 25：池城町から白山の方角

小松市池城町では E 氏(83)に聞き取りを行った。

池城町の白山神社で行われる祭は年 2 回である(表 10)。春祭は 4 月 18 日に，神社掃除をし，野菜の奉納，祝詞をあげる。秋祭は 9 月 18 日で，前日の晩に“神迎い”が行なわれる。“神迎い”は隣町の松岡町と一年交替で十一面観音像を町内の白山神社でお守りするものである。祭の前日の晩に白山神社に安置されている十一面観音像を出し，箱に入れ抱えて歩き，隣町の白山神社まで運ぶ。運ばれてきた十一面観音像は白山神社拝殿右横の社に安置される。秋祭の当日は町民で神社掃除に当たり，のぼり旗を揚げ，小松市上本折町の多太神社から神主を呼んで祝詞をあげてもらい，米や野菜の奉納をする。夜には踊りもあったが，現在では町民の数が減りのぼり旗を揚げることや踊りは無くなったそうである。

E 氏は白山に対して親しみは感じるが，それはこのあたりで一番高い山だからというだけのことだと言う。「在所の白山神社への農作物や米の奉納は行なうが，特に白山さんからの恵みだと思うことはない。」と言っていた。町内の白山神社へ詣でることは正月・春祭・秋祭以外ではなく，白山比咩神社へ行くことはあるが，年始の時に行く気があったら行く程度だということである。その他，行なわれる行事としては，浄土真宗関係でホンコサマ(報恩講)・総報講・青年講などがある。現在，青年講は行なわれていないそうで，報恩講の時は町民が公民館に僧侶を呼び，行なっているそうである。町民は白山神社の氏子としての意識よりも，浄土真宗大谷派で門徒としての意識が強いという。

小松市松岡町では F 氏(64)に聞き取りを行った。

松岡町の白山神社での祭は年 2 回である(表 11)。春祭は 4 月 18 日に行われ, 拝殿に棚を作り野菜（レンコンやダイコンなど）を奉納するという。秋祭は 9 月 18 日で, 前日の夜は池城町と 1 年交替で十一面観音像をお守りするための行事が行なわれる。祭の日は世話人である神社係の家が酒や米を集め，神社に奉納し，秋祭では小松市上本折町の多太神社から宮司を呼び，祝詞をあげてもらう。神社係が，毎月神社に納めるお金を集め，神社へ奉納している。白山神社へ参ることは春と秋の祭以外では正月の時

のみであり，山のほうに向かって手を合わせる高齢者もいるが，朝に夕に気がついた時にそうしているだけだという。またこの地域には，“蓮如さんの通った道”というのがあり，浄土真宗との関係がみられる。2～3 県を除いて全戸が浄土真宗である。F 氏自身も小松市東町の勧帰寺の門徒で，氏子としてよりも門徒としての意識のほうが強いという。

小松市那谷町では G 氏(81)・H 氏(77)に聞き取りをした。

那谷町の白山神社では年に 4 回祭が行われている(表 12)。G 氏の話では，4 月 17 日の春祭には各戸で柿の葉寿司を作り，青年団による獅子舞が舞われる。9 月 23 日の秋祭には子供神輿が町内を回り，神社に米や野菜を奉納するという。10 月 31 日の神送りには，在所にいるすべての神様が出雲へ帰られ，11 月 30 日の神迎いには，在所に神様が戻ってこられるという。これらの日は神様の機嫌が悪く，天候が荒れると言われているそうである。8 月 24 日の地蔵盆では町内の各家から地蔵尊への供え物を子供たちが集め，町内にあるすべての地蔵に代表者が参る。8 月 9 日の縁日には，昼に子供相撲が奉納され，夜には踊りが催されている。また，那谷町でもホンコサマ(報恩講)や若衆講，尼お講，物故者法要など浄土真宗関係の行事が多く行われている。G 氏は農家で，普段は意識していないが，白山の姿を見たときなど，町内の水が白山の水のおかげだと思うそうである。しかし，H 氏はそのように思ったことはないと言う。また，白山比咩神社へは距離的にも遠いため，参詣に行くことはないと言っていた。

池城町，松岡町，那谷町とも白山神社での祭礼はあるが，白山からの恵みだと思うことや，白山に対する感情は少なく，むしろ浄土真宗の影響が強く残る地域である。しかし，G 氏の話のように，白山を見たときなどは，その恵みを感じるなど，白山への親しみは持っていると言える。つまり，この地域の人々にとっては，白山の姿がえることで，白山への感謝の心が現れるといえる。

3. 能美市秋常町の事例
（③白山が見えるが白山神社がない地域）

(図 26・27)

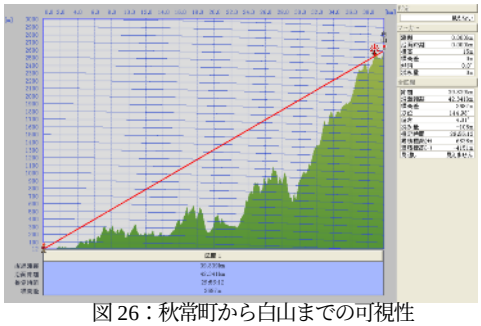

図 26：秋常町から白山までの可視性

(カシミール 3D を用いて筆者作成)

※　秋常町から白山頂上までの可視性を遮っているのは大汝が峰である。大汝が峰は白山として考えている

図 27：秋常町から望む白山

能美市秋常町では I 氏(69)と J 氏(65)，K 氏に聞き取りを行った。

I 氏の話では，氏神は八幡神社であるという。八幡神社の前社地は秋常古墳の上にあったため，平成 16 年に秋常古墳整備で鳥居や灯篭を移転，本殿・拝殿・幣殿を新築している。その際，新たに石清水八幡宮から分霊を勧請した。

祭は年 6 回，八幡神社で行なわれている(表 13)。春の大祭では御神事，巫女舞，祝詞があげられ，7 月中旬の夏越大祓えでは御神事と町民全員が御祓いを受ける。秋の大祭では，御神事，巫女舞，祝詞があげられ，子ども神輿が町内を回り，二箇所で御祓いと巫女舞が行われる。この時，もち米の奉納も行なっている。また，新嘗祭や年越し大祓も行なわれている。これらの祭の準備は，町内の 3 班で持ち回りの世話役の班が行ない，1 年交替に行なっている。祭の準備は 10 間ほどの旗木起こしや注連縄の準備をすることなどがあるという。奉納されたもち米は，ついて祭壇に飾り，祭の後切り分け各家に配られる。

祭の夜は, 世話人の家で夜通し飲み食いしていたが, 最近ではしなくなったそうである。

白山のことは，毎日意識しているようなことはないが，その恩恵は感じているという。飲料水である地下水も農業用水も手取川からの用水であり，どちらも白山からの水のおかげであることは感じているという。一方で，白山の恐ろしさも感じるという。特に昭和９年の手取川の大洪水などは白山さんのお怒りだと伝え聞いていると言う。

Ｉ氏とＪ氏は秋常町の八幡神社には参詣するが，白山比咩神社へ参詣もするという。毎年秋になると，白山比咩神社に新米の玄米を必ず納めている。現在は秋常町で１俵を納めているが，昔は各家々で１升ほどのお米を納めていたとのことである。お米を納めたお下がりとして，お札としゃもじ(最近は塗り箸)を頂く。白山比咩神社で行なわれる豊年講秋季大祭には土地改良区の代表が行くとのことである。

昔から秋常では「春西秋山」といって, 春の夕方, 西の方角をて曇っていたら雨，秋の夕方，白山を見て雲がかかっていると雨と言い，稲の刈り入れ時などを計っていたという。このほか，町内では報恩講や十日講も行われている。K 氏は，秋常町の八幡神社に参詣後，白山比咩神社行くという。以前は八幡神社に参詣することは無くても，白山比咩神社へは必ず参詣に行っていたとのことである。最近では必ずどちらの神社にも行くようになったそうである。秋常町で農作物が取れるのも水があるのも，ほとんどのものが白山の恵みだと思っている。また，台風の時は白山が屏風になるので被害が及ばないとこのあたりではよく言うという。

すなわち，秋常町には白山神社はないが，秋に白山比咩神社へ玄米を奉納することや白山からの水の恵みなど白山に対する意識は高い。これは，白山の可視性の影響と白山から流れる手取川の側に町が位置している事が影響していると考えられる。秋常町では, 神社という形では白山信仰が残っていないが, そこに住む人々にとって，白山は恵みの山であり，白山を崇敬する気持ちが明瞭に受け継がれている。

①・③・④の地域での聞き取りの結果から，白山がえない地域である③の小松市の３町では，普段は白山に対する意識は低いが，その姿を見たときには白山を意識し，その恵みに感謝していることがわかる。また，①の七日市町のように白山や白山比咩神社・手取川からも遠い地域でも，白山からの水に感謝しているのは白山がえることに関係していると考えられる。また，④の秋常町のように，白山神社がなくとも白山に対する意識が高く，白山比咩神社へ玄米の奉納や参詣などが行われているのは，白山が見え，白山に源を発する手取川が近くを流れているからだと考えられる。このように，白山の可視性と白山信仰の分布には一定の相関があると思われる。

つまり，白山神社の有無にかかわらず，白山がえるということが人々に白山への崇敬・畏敬の念を抱かせており，地域住民にとって，白山の可視性と白山への信仰心には，大きな関係があると感じさせられる。

おわりに

本研究では，神社が信仰に基づいて建てられた建物であると考えて，白山信仰の分布を測るための一つの指標として白山神社を用い，南加賀地域における白山信仰の分布のパターンを明らかにした。その結果，加賀市・小松市北部・白山市の平野部では白山神社が多く分布し，能美市では分布が非常に少ないという結果になった。つまり，南加賀地域における白山信仰の分布には偏りがみられた。

その偏りの要因として，まず白山の可視性から検証を試みた。結果，白山の可視性と白山神社の分布に関係がみられる地域もあったが，白山の可視性がないにも拘わらず白山神社がある地域，白山の可視性がありながらも白山神社がない地域などがあり，白山の可視性と白山神社の分布には，明確な関係がみられなかった場合があった。

白山の可視性がありながら白山神社が分布しない地域において，白山の可視性以外の視点から，白山神社の分布の要因を探ってみた。その要因として，八幡神社の分布から検証してみたところ，白山の可視性がありながらも白山神社がなかった地域に，非常に多く八幡神社が分布していた。その理由として

は，この地域が中世，石清水八幡宮領であった時期があり，そのときに領主である石清水八幡宮から勧請したものと考えられる。この地域においては，白山神社の分布の希薄さの要因に石清水八幡宮の影響が考えられる。

また，白山信仰と白山の可視性について，白山神社の分布だけでなく，地域住民からの聞き取りにより, より地域住民に密着したデータを集め検証した。その結果，白山神社の有無に拘わらず，白山信仰と白山の可視性には大きなかかわりがみられることが分かった。

これらの調査から，南加賀地域における白山神社の分布の要因として　　八幡神社の存在と白山の可視性が少なからず影響を及ぼしていることが明らかとなった。さらに, 地域住民の白山への信仰心には, 白山の可視性が大きな役割を果たしていることが分かった。

しかし，本研究では聞き取り調査に関しても対象数が少なく，信仰や姿勢について，十分に明らかになっていない。また，白山信仰の分布とその特徴を考えるにあたり，浄土真宗の影響を明らかにしていない。これらは今後の課題である。

謝辞

本研究を行うにあたり，聞き取り調査にご協力いただいた，西井明氏，宝谷奨氏，辻元博氏，薮下昇一氏，村中嘉正氏，岡本基麿氏，前川治一氏，前川カズ子氏, 山野勝弥氏, 山野外志江氏, 山岸紀美子氏, また，校歌の収集にあたりご協力いただいた方々，貴重な史料を提供して頂いた那谷寺住職の木崎馨山氏に心からのお礼を申し上げる。

※注

1)修験道とは，日本の山岳信仰の一形態で，山岳に登拝することによって，験力を獲得する道のことであり，その力を得た験者に帰依することで永遠の幸福を得ようとする宗教である(高瀬 1977)。

2) 霊山に登って真理を観察すること。また，霊山の頂上。

3) 白山比咩神社 http://www.shirayama.or.jp

4) 白山郷恵比壽神社は「白山」と社名にあるが，祭神に「菊理媛神」の名も「白山比咩神」の名もないので除外している。

5)図の作成にあたり，詳細な位置は『スーパーマップル 2005 北陸版』,『ゼンリン住宅地図 2007』, ゼンリン HP http://www.its-mo.com/)を使用している。

6) カシミール 3D は，3 次元の地図加工ソフトである。断面図や諸地点からの見通し，距離などを測ることができる。本研究では，白山山頂の御前峰までの見通しを測定している。

文献一覧

浅香年木 1987.『辰口町史 2－前近代編』石川県能美郡辰口町役場

浅香年木 1993.加賀国.『講座日本荘園史 6－北陸地方の荘園・近畿地方の荘園Ⅰ』吉川弘文館.pp.51‐65

朝倉隆太郎 1999.『山と校歌』二宮書店

石川郡自治協会 1927.『石川県石川郡誌』臨川書店

岡山俊雄 1988.『日本列島の接峰面』古今書院

小川弘司 2001.『白山の自然誌 21　白山の禅定道』石川県白山自然保護センター

神谷浩夫 2007.南加賀.藤田佳久・田林明編『日本の地誌 7 中部圏』朝倉書店.pp.569‐574

黒田俊雄 1990.『日本の中世の社会と宗教』岩波書店.pp63－126

下出積與 1977. 泰澄伝承と白山信仰. 高瀬重雄編『山岳宗教史研究叢書 10－白山・立山と北陸修験道』名著出版.pp.59‐77.

下出積與 1999.『白山の歴史―神と人とその時代』北國新聞社

高瀬重雄 1977.白山・立山と北陸修験道.高瀬重雄編『山岳宗教史研究叢書 10－白山・立山と北陸修験道』名著出版

田上善夫 2007.中央日本における山岳信仰施設の構成および社寺の関係『日本地理学会発表要旨集

71』.p.231
竹内理三 1975.『荘園分布図(上巻)』吉川弘文館
玉井敬泉 1985.白山の祭神と信仰.『民衆宗教史叢書 18－白山信仰』雄山閣出版.pp.229‐254
東四柳史明 2003.霊峰白山と神々の座.pp.8‐9,神階叙位と白山天台への道.pp.24‐25,本宮を支えた神領と神人.pp.32‐33.白山本宮神社誌編纂委員会『図説白山信仰』白山比咩神社
橋本政宣 2003.北海道の開拓と白山神社.白山本宮神社誌編纂委員会『図説白山信仰』白山本宮神社誌編纂委員会.pp.168‐169
福原敏男 2003.能登の白山信仰－鳥屋町春木地区.白山本宮神社誌編纂委員会『図説白山信仰』.pp116‐117
文化庁 1972.『日本民俗地図III(信仰・社会生活)63－講(山岳信仰関係)』国土地理協会
守部　伍 1976.『石川県神社誌』石川県神社庁
山岸　共 1977.白山信仰と加賀馬場.高瀬重雄編『山岳宗教史研究叢書 10－白山・立山と北陸修験道』名著出版.pp.28－58
山岸　共 1985.白山の見えること.小倉学編『加能民俗研究 13』加能民俗の会 pp.41－47
由谷裕哉 2005.一向一揆の時代における白山か加賀側の宗教環境.『日本宗教文化史研究 9－1』日本宗教文化史学会.pp.35－52
若林喜三郎・高澤裕一・蔵　国晴・杉本晴介・堀田成雄・室山　孝・森田喜久男・橋本澄夫・瀬戸　薫・奥谷陽一・木越祐馨・東四柳史明 1991.総論.平凡社地方資料センター編『日本歴史地名大系 17－石川県の地名』平凡社